

ねじりはちまき

10月 神無月 寒露 霜降の月になりました。

10月1日、衣替えです。4日、旧暦の8月15日で月見、芋名月です。
8日、寒露。9日、体育の日。20日、えびす講。23日、霜降です。

10月の月は、男と女の縁結びについて相談するために、諸国の神様が
出雲大社に集まり、国元を留守にするため神無月と言われています。

ただし、出雲地方では神様が集まることから、神有月と呼ばれています。

また、諸国では神去月とか、あれほど賑やかだった雷が鳴りをひそめる
ところから、雷無月とも言われています。

台風による長雨も明けて、秋晴れの良い日が続くようになります。
野山は秋の色彩を濃くして、冬鳥も渡って来て朝晩に寒さを感じ始めます。
この頃になると、食材も多くなります。お酒もうまくなります。
呑み過ぎ食べ過ぎに注意して、すがすがしい秋を楽しく過ごしたいと思う
この頃です。

幸田 常一



7月から、福島市の新築工場の現場をお世話になっております。
今月末には、完成する予定です。
また、本宮市の現場では、住宅の新築工事が始まりました。
こちらは事務所の近くの現場になります。

「サクラヤマ」

去る9月初旬、私の加入させて頂いているk市にある山岳愛好会の月例山行が南会津町舘岩にあるサクラヤマ（以下「佐倉山」と書きます。佐倉山が正式名称です。）に、登山して参りましたので今回はその状況を報告させて頂きます。

佐倉山は、会津100名山の1山であり標高1730m、登山口の標高は780m、登山口からの標高差は1000m足らずの山ですが、アップダウンの多い山であり、加えて岩山が続き山頂を制覇せずに下山してしまい残念な山旅となる一方で、大変満足もして帰る事が出来ました。

会員15名を乗せたマイクロバスが、予定時間の6:00にk市役所を出発途中雨不足と湖水の利用などで湖面が低下し、満水時には湖底に沈んでいた茶色の湖岸が、縁取りした羽鳥湖と深緑色の山並みに真っ白い朝霧がかかり、まるで一幅の絵を見る様な絶景を眺めながら、エンジンの音も軽やかに進みました。

途中、会津田島駅と番屋道の駅で休憩して、9:10登山口に到着。登山口の広場でGさんの指導で準備体操の後、いつもの通りwさんを先導で出発。

登山の途中、最初のピークで体力的に山頂を目指す事が無理と判断した6人が登山道を引き返す事になり、残る9人で山頂を目指す事になりました。この仲間に私も入れて頂き、尾根道を歩きアップダウンを繰り返して、無線中継塔跡地に到着しました。

この跡地からの眺めは実に素晴らしく、足下に広がる南会津独特の色とりどりのトタン屋根の民家や、黄金色に輝く水田、その向こうには深緑色の南会津の山々が連なるなど絶景を堪能し、心地よい初秋の風を全身で楽しむ事が出来ました。

再び細い岩の尾根道を辿り、幾つかの垂直に近いピークの岩山をよじ登り、佐倉山の山頂を目前にして佐倉山山頂到着予定時間となり、9人の仲間は思い思いの場所で昼食となる。

この事態は、参加した会員が加齢に伴い、体力が衰えてしまった事が理由のようだ。（10年程前に、この山岳愛好会が佐倉山に登頂した当時の計画が下敷きになっていたらしい。私も加齢に伴い、体力が減退して皆様と一緒に歩くのに精一杯でした。）

昼食は、家を出る前に家内が作ってくれた、紫蘇のお握りの美味しい事。まさに天下の逸品である。佐倉山の頂に立つ事は叶いませんでしたが、絶景

を堪能して心地よい初秋の風を全身に受け、美味しいお握りを食べて大満足。昼食後の休憩の後、下山の途につきました。下山の道は、無線中継塔跡地の手前から直接車道に下るコースを辿りました。登山の際に疲れ果てた私には、アップダウンが無く大変楽なコースで大いに助かりました。

先に下山した6人を乗せたバスに乗り込み、記念撮影場所である「たかつえ温泉」近くの蕎麦畑へ。

蕎麦の白い花は盛りを過ぎていましたが、広々とした蕎麦畑の奥に七が岳が聳え立ち、青い空にぽっかり浮かんだ白い雲と、写真を撮るには絶好の場所らしい。いわきナンバーの車で写真を撮りに来ていたらしい中年の男性が、盛んにシャッターを切っておりました。

最後に南会津町の夢の湯で、今日の汗と疲れを洗い流して、心地よいエンジンの音を聞きながら、夕闇の迫る頃全員元気に出発地に帰って参りました。そして、この歳になっても元気で山登りを楽しめることと、迎えに来てくれた家内に感謝しつつ帰宅した次第です。

k・s記

.....

おいしい♥10月(*^_^*)

「さつまいも」

おいしい秋の野菜や果物がたくさん出回り、食欲は増すばかり…。

今月は「さつまいも」です。

さつまいもは食物繊維が豊富な野菜として知られていますが、ビタミンCも豊富で、しかも加熱しても壊れにくいそうです。

風邪の予防に有効ですし、美肌効果にも期待できます。

<季節の花>

犬 蓼 (いぬたで)

道端や畑などでよく見かける草花、「犬蓼」。「赤まんま」と言えばああ、あれか！と思い出す方も多いでしょう。ピンクのもっと紫に近い小さな花を付ける草花です。花をぱらぱらにしておままごと遊びをしたのを思い出します。赤まんまを見ると小さい秋を感じます。

今回は先の大戦の最中或は大戦後に、海外において特異な状況の中で志をもって一所懸命生き抜いた日本人の秘話を三つ紹介したいと思う。

その一つは杉原千畝（ちうね）のことである。杉原千畝は外交官であった。杉原は第二次大戦（1939年から）中にリトアニア（バルト海に面し、ポーランドに接する）のカウナス領事館に赴任していた。その時ナチス・ドイツの迫害より逃れようとする難民（その多くはユダヤ系）がピザ（日本通過査証）の発給を求めて日本領事館に殺到する事態に直面する。1940年7月のことである。なぜそういう事態になったのか。その背景を探ると、一つ目はナチス・ドイツの占領下にあったポーランドからその迫害より逃れようとする難民がリトアニアに流入していたこと、二つ目はその難民がさらにリトアニアから逃れようとするシベリア鉄道を利用して極東（日本も）経由で逃れるルートしか残されていなかったこと、三つ目は当時リトアニアが既にソ連の占領下であり、ソ連は各国に大使館や領事館の閉鎖を求めていたが、そういう中で日本領事館のみが業務を続け、閉鎖していなかったことが挙げられる。ナチス・ドイツのユダヤ人迫害の惨状を熟知していた杉原は、早急に対応すべく本国・外務省に伺いを立てるが、外務省の訓令はドイツとの軍事同盟の建前から厳格な条件に適合するものみの発給しか認めないとするものであった。それでは難民故に訓令の受給要件を満たしていない者も多く、救われない者が続出する。だが、訓令に反したピザを発給するには余程の覚悟を必要とする。しかし事態は急を告げている。領事館閉鎖まで時間もない。杉原は苦悩の末、人道上の観点から外務省の訓令に反し、受給要件を満たしていない者に対しても、一律にピザを発給することに踏み切る。その数は1940年の7月から8月にかけて6000人に昇ったという。発給事務はすべて手書きであったのだから、それは大変な激務でもあった。こうして発給された「杉原ピザ」によって多くの命が救われたのである。日本では神戸にユダヤ人組織があったので、ウラジオストック経由で神戸を目指して来たユダヤ人たちもいたという。

その後の杉原はどうなったのか。後日談に触れたい。杉原に対する外務省の処遇は冷たいものであった。大戦後何とか帰国を果たした杉原を待っていたのは、退職願を提出せよということだった。彼は外交官の職を失う。そこで商社努めをすることになる。そんな不遇の境涯にあった杉原であったが、杉原ピザで難を逃れた一人であるイスラエルのソフラ・バルハフティク（その時宗教大臣になっていた）と28年ぶりに再会する機会が訪れる。ソフラは杉原が失職覚悟で行ったピザ発給がどんなに多くの人を救ったことか、それが正当に評価されていないのは遺憾であり、杉原の名誉を回復すべきと立ち上がる。それが契機となって、時間はかかったがやがて杉原の名誉が回復される。それは2000年（平成12年）のことである。時の外務大臣河野洋平が杉原の顕彰演説を行うことによって政府による公式名誉回復がなされたのである。ご覧になった方もいると思うが、2015年には杉原の生涯が映画化され、多くの国民が知るところとなる。また、杉原の生誕地、岐阜県八百津町には杉原千畝記念館が建立されている。もう一つエピソードを紹介したい。杉原は世界のユダヤ人から「日本のシンドラ」¹と尊敬を集めているが、そういうこともあって東日本大震災の時には世界各地のユダヤ人が呼びかけ合って義援金を始め多くの支援が寄せられたのだというのだ。杉原の人道上の決断と実行がきちんと語り継がれ、その恩義を決して忘れないというのは敬服するのみである。

その二つは肥沼信次（こえぬまのぶつぐ）のことである。小生も初めて聞く名前である。テレビの番組で取り上げられて知ったのである。その生き様を知って感動させられた。肥沼は医者である。元々は数学好きの少年だったが、やがて父と同じ医者を志すようになり、大学は医学部に進む。話はそれからだが、その肥沼が1937年にドイツのベルリン大学

の医学部に留学するのである。肥沼のすごい所は、6年の留学期間中に大学教授の資格を取得してしまうのである。教授資格の取得は東洋人として初であったということだ。ではそのまま大学に残ったのかというと、肥沼はそうではなかった。いつのことなのか記録上ははっきりしないのだが、肥沼は大学そしてベルリンを去ってしまうのである。ではどこへ行ったのかというと、リーツェンというポーランドとの国境近くの小さな町（旧東ドイツに属する）であった。そこは戦争で瓦礫の町と化していた。そこは国境近くだから難民であふれていた。加えて、衛生状態が悪化して伝染病のチフスが蔓延していた。しかし、医者は軍部に徴用されて医療体制は十分でない。そういったところに肥沼は姿を現したのである。肥沼はリーツェンの置かれている状況を何らかの形で知るところとなり、そこで医者としての使命を果たそうとして赴いたと考えられる。肥沼は不眠不休でやれることをやり尽くそうとチフスの治療に専念するのである。肥沼についていた看護婦の証言が残っている。その看護婦が言うには「肥沼先生はまるで勇敢な兵士のように入っていき、身の危険を顧みず、最も酷い症状の患者に持ってきた貴重な薬をせつせと与え、また次々に患者を診て回るんです。こんな無私無欲の行いを目の当たりにして、気の遠くなるような感動に打たれました。」とのことであった。その肥沼に立場の変化が訪れる。大戦が終了し、リーツェンはソ連の占領下に入る。ソ連軍は肥沼に伝染病医療センターの初代所長を命ずるのだ。その立場になっても肥沼のやることは変わらない。それから間もなく肥沼はチフスに感染してしまうのだ。そして1946年3月8日に37歳の生涯を終える。燃焼尽くした感じだ。後になって1992年にリーツェン市は肥沼に名誉市民の称号を与え、彼の業績を称えた。また、肥沼の偉業を忘れないために「肥沼杯」の「柔道大会」が今でも開催されている。そして市内には肥沼通りもあるという。さらにまた、肥沼が生前「日本の桜はとてもきれいだ」と言っていたことに鑑み、市内に日本から送ってもらった桜を植樹し、桜並木の桜の花を見て、肥沼のことを偲んでいるというのだ。杉原の項でも触れたが、東日本大震災の時リーツェン市民も肥沼の恩を忘れず、義援金を送ってくださったという。

次に三つ目だが、これは個人ではなく、インドネシアで終戦を迎えた残留日本兵のことだ。戦後独立を宣言したインドネシアに対し、オランダはそれを認めず、再植民地化しようとした時のこと。インドネシアはオランダに対し独立戦争を展開する。この時インドネシア独立に捧げた残留日本兵がいたのである。祖国への帰還を選択せず、インドネシアに留まったのである。では、具体的に何をしたのか。先ずは旧日本軍が保持していた武器を独立軍に供与した。残留日本兵には将校クラスもいたので軍事上の作戦や将兵の教育・訓練に関わって指導した。そして勿論戦闘にも参加して戦った。残留日本兵は約900人いたと伝えられているが、そのうち約300人が独立戦争で戦死したそうだ。独立戦争は1945年から1949年まで続き、1949年の12月に独立が実現する。戦死した残留日本兵は英雄墓地に埋葬され、生き残った残留日本兵はその後の独立記念式典に招待される待遇を受けた。また、インドネシアの国籍を取得し、現地の女性と結婚して家族を持つ人もあった。そういう方々も今はほとんど他界されたということだ。こんなことがあってインドネシアは今も変わらず親日的であるというのである。それにしても残留日本兵といわれる人々はなぜ現地に残る道を選んだのか。終戦＝敗戦ということ信じられなかったのか。残留日本兵はアジア全体で約1万人いたという説がある。その中で、インドネシアの残留日本兵はアジア植民地の解放・独立を真剣に考え、自分たちの任務として残留を選択したのだろうか。その行動をみると本当だったのかも知れないと思うが、どうだろうか。

<会社近況>

10月に入りました。
朝晩、寒くなりましたね。冬を迎える準備はされていますか？
暖房器具の準備の他、すきま風の防止、屋根や雨樋や塀など家の周りの点検
をして破損箇所があれば補修しておくなど、来る冬に向けて備えておくとい
い
ですね。

現在は、福島市の現場で新築工事をお世話になっております。
今月末には完成の予定です。
また、事務所近くの現場で、住宅の新築工事をさせていただいております。
つい先日、上棟式をさせていただいたところです。
こちらは、若いご夫婦と子どもさん3人とご両親の7人家族なので、
住まいもちょっと大きめです。
子どもさんもまだ小さいので、にぎやかに走り回る姿が目に見え
よう
です。
来年の春には完成の予定です。

<お知らせ>

10/9（月） 「体育の日」 お休みさせていただきます。

.....

平成29年10月5日発行
有限会社 幸田建設
<発行責任者> 幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話…0243-44-3816

<後記>

雨が降って寒いなあと思ったら、
次の日は夏みたいに暑かったりする
ので、体調を崩し風邪をひきやす
くなりますね。お体、どうか大切に。

寒がりの主人は長袖シャツの上に
セーターを着ているのに、その上に
冬用のジャンパーを着て、さらにス
トーブまで点けていました。もう、
どんだけ寒いんだい？

(事務員 k)